

平成29年度教育改革FD/ICT理事長・学長等会議の開催結果の概要

- 開催日：平成29年8月2日 青山学院大学渋谷キャンパス
- 参加者：114名（60大学、6短期大学）、28年度は125名
- テーマ：「学士課程教育の質的転換に向けた課題とICT活用を含む改革方策」
- 会議の目的
大学が掲げている三つの方針の実質化に向けた教育改革を振り返り、課題及び戦略を再確認するとともに、ICTの効果的な活用の方向性を探求することにした。
- 確認できた点
 - 多極化、グローバル化、情報化、若年者の減少などの変化は、社会の大転換をもたらしている。言われたことをうのみにして覚え、選択肢から答えを探す教育はこれからは通用しない。求められるのは、知識・技能をもち、答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力と主体性をもって多様な人々と協働して学び働く力で、学生が卒業後に幸せな人生を歩んでいけるよう高大接続改革と大学と社会が接続する大社接続による教育改革が必要。
ICT活用で重要なことは、具体的にどのような能力が身につくのか、例えば推論や合理性などの思考力を明確にすることが重要。人工知能の出現により、学生の学修状況を把握し、最良の教育を提供できるようになるが、それには学修でどのような点でつまづいているのかなどのデータを常に蓄積しておくことが肝要である。
 - IRは、入学から卒業まで学生の成長支援を中心にエンロール・マネジメントに活用している。ビッグデータベースの構築は困難なため、既存情報をリスト化して全学に公開し、入学から卒業までの追跡情報を関連づけたデータを構築して可視化し、早期退学者の防止対策、授業外学修時間と学修行動分析による授業デザインの改善、授業の内容・方法・評価の改善に活用している。組織的に推進する仕組みとしては、IR活動の計画とIR分析結果を踏まえた評価の協議を大学全体で行うことにより、教育改善のPDCAサイクルを形成することが効果をあげている。
 - 大学教育の質保証の課題は、科目に依存しないで測定する直接評価が有効であることから、専門を学ぶ力、人間力や社会人基礎力、語学力や国際理解力を基盤力として、スマートフォンを介して1年入学当初、1年終了時、3年次に基盤力テストを行い、達成度の伸びを評価して学生にフィードバックしている。また、地域目線で教育評価・教育改善を行うために企業、自治体などによる外部評価の枠組みを作り、卒業生に期待する資質・能力の意見交換、学生との懇談、授業参観による評価・意見助言などの外部評価改善活動が必要である。
 - 与えられた情報・知識をうのみにするのではなく、多面的に推論過程を吟味する論理的・合理的思考を訓練する仕組みとして、社会課題をテーマにネット上で多分野による学生がチームでPBLを行うことにより、関連分野知識を組み合わせて問題解決を考察する分野横断型授業の必要性が提案された。
 - 知識の獲得と汎用的能力の向上を図る方法として、教員が協働して学科のコア科目群を複数の教員で設計し担当するチームティーチングを通じて、知識獲得を行う反転授業の設計、課題解決を目指す授業設計を共同で担当することにより組織の教育力が向上したことから、大学教育の改善に教員の協働が不可欠である。
- 実施結果（24名、回答率22%によるアンケート結果を踏まえて）
 - アンケートの多くが、大学教育の在り方を考えることができた。ICT活用の話題提供も具体的で優れた取り組みで大変参考になったとの感想が寄せられた。
 - 今後希望するテーマとしては、教育改革に向けた教員の意識改革、アクティブ・ラーニングの優れた取り組み事例やアクティブ・ラーニングを担当する教員の教育力向上対策、グローバル人材育成のためのICT活用、eポートフォリオの活用などであった。